

全国盲ろう教育研究会 会報 第14号

2016. 1月発行

全国盲ろう教育研究会事務局

各地から新春の便りが届きました。皆様にとりまして、実り多い1年となりますように研究会としても情報発信に努めていきたいと思っております。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

●全国盲ろう教育研究会第13回研究協議会報告

2015年9月19日・20日に全国盲ろう教育研究会第13回研究協議会を開催いたしました。今回は、埼玉県熊谷市の四季（とき）の湯温泉 ホテル・ヘリテイジにおいて、盲ろうの子とその家族の会「ふうわ」と初の共同開催を実施し、全国各地から盲ろう教育に携わっている教職員や関心をお持ちの方々、盲ろう児者とその家族、ボランティアなど約200名が集いました。

会場を感動に包んだ実践報告をはじめ、ポスターセッションでは時間を惜しんで語り合い、ワークショップで様々な体験活動に取り組みました。

開会式では、当研究会会長、ふうわの実行委員長、それぞれの立場から共同で開催することの意義について話しがあった後、新潟県立新潟盲学校 上田淳一氏、田邊佳実氏により「Sさんの学校生活紹介～新潟盲学校の取組～」の実践報告が行われました。

2日目のスペシャルプログラム（全体活動）は、「ふうわ」と研究会が共同開催することで初めて実現した取組でした。郊外の森林公園や室内の体験コーナーで、研究協議会参加者と「ふうわ」参加者や保護者の方、ボランティアが盲ろう児者と共に楽しい時間を過ごしました。

2日間の様子を紙面にて報告いたします。

*なお、事務局の責任において概要をまとめさせていただきましたことについて、ご了承ください。



●第13回定期総会報告 【9月19日 16:50~17:20】

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、議事案件の審議に入りました。

・議案1 2014年度事業報告

1. 運営委員会を9回開催し、運営基盤の整備を図った。
2. 全国盲ろう教育研究会会報に総会および研究協議会の報告を掲載・配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努めた。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、教育研究の向上に寄与すると共に会員相互の情報交換に役立てた。
4. 全国盲ろう教育研究会第12回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第13回研究協議会の準備を進めた。
5. 「盲ろう教育研究紀要第11号」の発行に向けて編集作業を行い、2015年2月に発行した。
6. Webサイトの充実を図ったが、十分な活用と情報交換には至らなかった。

○原案通り、了承されました。

・議案2 2014年度会計報告

【2014年度全国盲ろう教育研究会会計報告】

【収入の部】

*単位は円

項目	予算	決算	備考
前年度繰越	413835	413835	
年会費 (2,000円×130名)	260000	206000	会員数(2015年3月31日現在) 125名。納入者 83名(未納分の一括納入を含む)。納入率 66%
ご寄付	—	7000	
利息	—	126	
合計	673835	626961	

【支出の部】

*単位は円

項目	予算	決算	備考
定期総会報告書発送費	45000	12474	会報第12号に定期総会報告の内容を含めた。
会報第13号発送費	45000		
第12回研究協議会案内発送費	60000	25088	

盲ろう教育研究紀要第 11 号発行費	200000	202392	600 部印刷
盲ろう教育研究紀要第 11 号発送費	100000	0	第 13 回研究協議会案内に同封して発送した (2015 年 5 月)。
Web サイト維持費	35000	18144	サーバー利用料のみ。ドメイン更新料は担当者の厚意により担当者負担となった。
事務費	100000	87621	
会議費	70000	50440	第 82 回～第 90 回運営委員会交通費
予備費	18835	16686	慶弔費
合計	673835	412845	

残金 214116 円【収入 626961 円－支出 412845 円】は次年度に繰り越します。

【第 12 回全国盲ろう教育研究会総会・研究協議会会計報告】

【収入の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
参加費	166000	会員参加費 3000 円×30=90000、非会員参加費 4000 円×19=76000
懇親会費	54000	2000 円×27=54000
第 11 回繰越金	511253	
合計	731253	

【支出の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
事務費	109634	
懇親会費	53991	
情報保障費	121924	手話通訳費用、保育ボランティア 19 名交通費
保育雑費	6070	
講師謝金・交通費	70220	
合計	361839	

残金 369414 円【収入 731253 円－支出 361839 円】は、今後の研究協議会での運営費として使用します。

○原案通り、了承されました。

・議案3 2015年度事業計画

1. 定期的に運営委員会を開催し、運営基盤の充実を図る。
2. 全国盲ろう教育研究会総会・研究協議会報告を広く配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努める。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、盲ろうに関する情報提供を行うと共に、会員相互の情報交換に役立てる。
4. 全国盲ろう教育研究会第13回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第14回研究協議会の準備を進める。
5. 「盲ろう教育研究紀要第12号」の発行に向けて編集作業を行う。
6. Webサイトの内容の充実と活用を図り、情報提供および情報交換を図る。
7. 盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図る。

○原案通り、了承されました。

・議案4 2015年度予算案

【2015（平成27）年度全国盲ろう教育研究会予算（案）】

【収入の部】

*単位は円

項目	金額	前年度との差
前年度繰越	214116	-199719
年会費（2,000円×130名）	260000	0
合計	474116	-199719

【支出の部】

*単位は円

項目	金額	前年度との差
定期総会報告書発送費	30000	-15000
会報発送費	30000	-15000
第13回研究協議会案内発送費	30000	-30000
研究紀要第12号発行費	200000	0
研究紀要第12号発送費	50000	-50000
Webサイト維持費	35000	0
事務費	45000	-55000

会議費	50000	-20000
予備費	4116	-14719
合計	474116	-199719

○原案通り、了承されました。

・議案5 役員改選

会長 中澤 恵江
副会長 松本 末男、星 祐子
事務局 西村 晴美
会計 柴崎 美穂
会計監査 星野 勉、三科 聡子

○了承されました。

●第13回研究協議会報告

○実践報告 【9月19日】13:30~15:00

「Sさんの学校生活紹介～新潟盲学校の取組～」

新潟県立新潟盲学校

上田 淳一 氏
田邊 佳実 氏

上田 淳一 氏

Sさんが新潟盲学校幼稚部に入学して13年5ヶ月が経ち、現在高等部2年生になりました。この間、長くSさんと過ごした学校生活（幼稚部から小学部3年まで、中学部2年から現在まで）を振り返りながら、Sさんの成長を共有し、盲ろう教育の成果や課題について考えるきっかけになることを願います。



（Sさんのプロフィールについて紹介）

【映像を用いながらの説明】

幼稚部において環境把握の手だてとして、自分の教室の目印、廊下の目印等をつけ、移動の手がかりとしました。また、教室に跳び箱を設置し、活動の拠点とし、教室内の移動の手がかりとなるように足で踏んでわかるようにガイドラインをつけました。

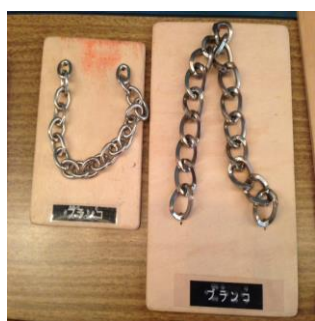
いよいよ小学部就学時になり、就学に向けた準備として教育課程、環境整備の検討、職員の研修会、盲ろう児が在籍している他校に出向いての情

報収集等とともに、保護者からの要望も伺いました。そして、教室環境や時間割などを整え、小学部入学初日、Sさんは空色のランドセルを背負って登校してきました。新しい環境だったので、戸惑いもあったと思います。重複学級朝の会で、オブジェクトキューを入れたボックスで一日のスケジュールを確認しました。小学部低学年のうちにはダイナミックな遊びをたくさんし、ボールスライダーや階段を使った段ボール滑り台など楽しみました。絵の具や小麦粉を使った感触遊びを楽しみながら、作品づくりもしました。雪国新潟では冬は雪山でのそり遊びが定番です。保護者から環境の見直しの要望もあり、3学期の初日に教室環境をSさんと一緒に行いました。特別支援教育総合研究所での盲ろう指導者モデル研修やその後のフォローアップ研修で学んだように、環境を勝手に変更するのではなく、Sさんと一緒に環境の変更を行いました。朝の会の場所を隣の教室に移動するといった大事な自分の拠点が変わることによってSさんははじめ動揺したものの2日目からは混乱した様子は見られませんでした。盲ろう児と一緒にその過程を行っていくことの大切さを実感しました。地域の学校との交流も行いました。机に向かって学習ができるような取組も考えてきましたが、3年生のころは形の弁別などしっかりと机に向かっての学習ができるようになってきました。【学習の様子について映像による紹介】

その後、私（上田先生）が異動し、B先生が担任となりましたが、B先生とSさんの関係はとても良好で、Sさんは安定した学校生活を過ごしていました。

小学部から中学部への移行についてです。担任と教室環境が変わり、Sさんに大きな混乱をもたらしました。小学部時の担任のB先生が登校時の受け入れをしても中学部の教室に行くことを拒否すると行ったことが続きました。同じ学校であっても適切な配慮がなければ盲ろう児には大きな混乱を引き起こします。幼稚部から小学部、中学部から高等部では担任の私（上田先生）が持ち上がりましたが、小学部から中学部ではB先生は持ち上がり、Sさんの様子がほとんどわからない教員が担任となりました。Sさんの不安と混乱の要因を考えてみます。一つには、Sさんの様子を知る教員がいないこと、二つ目はSさんの拠点（安全基地）がなくなったこと、三つ目は周囲の環境がよくわからない、4点目は教科担任制で時間毎に教員が変更になること、これらが考えられます。小学部6年生時の担任のB先生との関係が良好で「盲ろう児に必要な教育的配慮」を見えにくくしていたこと、管理職や受け入れる学部の理解・協力を十分得られていなかったことがあったと思います。このような状況で教育委員会も交え、支援会議を行いました。その時のお父さんの言葉が耳に残ります。「Sは人を知るのに時間がかかる。」「Sに算数や国語を教えて欲しいとは望まない。ただ盲ろうの教育を教えて欲しいだけです。」

ゆっくりとではありましたが、担任のC先生とSさんは関係をつくっていききました。4月に異動で新潟盲学校に戻ってきて、C先生のサポートをすることになった私（上田先生）は、オブジェクトキューの見直しをしました。Sさんは、幼稚部から現物（食事＝スプーン）をオブジェクトキューとして活用してきました。中学部1年の途中でそれらの現物を統一した規格の木の板に貼り付けるように替えていきました。木の板がオブジェクトキューであるという意味を理解すると、板に貼り付ける物のバリエーションを広げていくことがスムーズにできるようになりました。その後、高等部2年生の現在は中学部1年当時の板の4分の1の大きさまで縮小したサイズに移行することができるようになりました。



中学部2年になった時にC先生は異動し、私（上田先生）が担任となりました。2度目の担任となり、Sさんとの信頼関係をゆっくりと築き、点字の見本合わせの教材も興味を示すようになってくれました。（見本合わせの教材を使っただけの学習の様子について映像で紹介）何が面白いのか、自分の考えが一致するというのが面白いのだと思います。学校生活の中で最も主体的な姿を見せる時間となりました。リペットからLサイズの点字、通常点字へと移行し、組合せをクリアしていきました。見本合わせの課題学習は、触弁別の力を伸ばしただけに留まらず、床面着席の生活スタイルから椅子着席の生活スタイルに移行し、学習で交わされる教員とのコミュニケーションの楽しさを味わうことができました。



続いて高等部への移行ですが、中学部移行時の混乱を繰り返さないように、高等部職員への研修会開催、配慮事項の説明や環境の確認など、丁寧に行いました。教室移動の大事な儀式は離任式の時にしました。自分の椅子を高等部の教室に移動しました。同様に机も移動し、大好きな見本合わせをしてみました。音楽鑑賞会で楽器に触ったり、校外学習で動物に触れたり、自転車に乗ってコンビニに買い物に行ったり、アイスリンクでスケートをしたり、お姉ちゃんと登校したりする時もあります。【登校時、

モップがけ、給食時、歩行、自転車に乗れるようになった様子、プールでの泳ぎを楽しんでいる様子など動画で紹介】

田邊 佳実 氏

私からは、福祉サービスの利用について紹介します。小学部1年生の頃から多くの福祉サービスを利用してきました。家族、学校職員以外の人との関わりが広がってくるにつれ、関係者間での支援の連携を図ってきました。盲ろう通訳派遣事業、行動援護、移動支援、月に1回の短期入所などを利用してしています。

上田 淳一 氏

Sさんの世界ってどんな世界なのか、考えてみました。見えない・聞こえないという、極端に周囲の情報を得にくい状態にあって、Sさんが安心して過ごすことができる場所はとても大切です。現在、家庭、学校、プールなどが安心して過ごせる居場所です。この安心して過ごせる居場所を増やしていくこと、関わる人が連携することでSさんが過ごしやすい活動しやすい状況が生まれるのだと思います。

最後に、Sさんと長くかかわり合う中で感じることを述べさせていただきます。SさんのQOL向上に欠かせないことは、安心感、体調の安定が土台にあって、自ら考え、判断し、行動すること、Sさんが主体的に生きるという実感を持てるようにすることだと思います。Sさんにとって苦痛は考える情報がないこと、考える機会があたられないことだと思います。Sさんが主体的に生きていけるように、そして多くの盲ろう児の皆さんが主体的に生きていけるように願って報告を終わります。

その後、Sさんが会場に元気な姿をみせてくれました。

Sさんのお姉さんから

上田先生がわかりやすいサインなどでSとコミュニケーションがとれるようにしてくれて、Sと接しやすく、こちらの意思も伝わりやすく、Sの意思もわかるようになってきて、距離が近づいたように感じています。寝不足や不安定な時に、その気持ちがわからない時が辛いです。嬉しい時は、指文字で伝えたことがわかって抱きついてきてくれる時がとても嬉しいです。

○ポスターセッション

【9月19日】15:15~16:30

以下の8本のポスターが出されました。盲ろう当事者から2件の発表があったことは特



筆すべきことでした。今回は、教育実践報告のポスターが出されなかったことが残念なことで、次回への課題となりました。

- | | |
|----------------------|---------|
| ① 全国盲ろう教育研究会のこれまでの軌跡 | 中澤 恵江 氏 |
| ② 盲ろうの子とその家族の会「ふうわ」 | 鈴木 由佳 氏 |
| ③ ぼくの余暇の楽しみ マラソン | 尾崎 雅 氏 |
| ④ 指点字学習会の取り組み | 石田 良子 氏 |
| ⑤ 一人での冒険旅行 | 森 敦史 氏 |
| ⑥ 横浜訓盲学院での手話研修の取り組み | 石田 早苗 氏 |
| ⑦ ヘリコプターについて | 仲里 道子 氏 |
| ⑧ 「CHARGEの会」活動紹介 | 田畑真由美 氏 |

○スペシャルプログラム 【9月20日】9：00～11：30

夏のような日差しの中、外グループはバスで国営武蔵丘陵森林公園へ向かいました。参加した盲ろう児者は11名。それぞれの盲ろう児者と研究協議会参加者、「ふうわ」参加者、ボランティアがグループをつくり、一緒に過ごしました。様々なアスレチックに挑戦したり、ローラー付き滑り台の振動を感じたり、水遊びを楽しんだり、園内を歩き木々の香りを満喫したりしました。

室内では、6つの体験コーナーが準備され、盲ろう児者7名が参加しました。振動や光、音の出る手作りおもちゃで遊んだり、エアートランポリンやボディソニックを楽しんだり、外のベンチでおしゃべりをしたりしました。藤かご作りコーナーでは盲ろう者が講師となり、参加者に作り方を伝えていました。

研究協議会参加者の中には、初めて盲ろう児者と関わった方も多く、「盲ろう児者が見通しをもって行動できるよう、各グループで一生懸命話し合う場面が良かった」「グループリーダーの盲ろう児者への関わり方が勉強になった」「保護者と話をする機会をもつことができ良かった」「盲ろう児者に情報を伝える難しさを改めて感じた」等の感想が出されました。

スペシャルプログラム実施にあたり、「ふうわ」の集い実行委員会では、埼玉県内外の大学・高校・企業等にボランティア募集の呼びかけを行い、70名程

の協力者と共に準備を進めたそうです。おかげさまで、研究協議会参加者全員が盲ろう児者とともに、素敵な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

○テーマ別ワークショップ【9月20日】13:00~14:30

以下の6グループに分かれてワークショップを行いました。

① おもちゃ作り体験

参加者：計20名（視覚特別支援学校 7名、肢体不自由特別支援学校 1名、ふうわ 8名、その他 4名）

ワークショップが始まる前、次々とテーブルに並ぶおもちゃに目を輝かせる参加者。講師の奈良県立奈良養護学校製肢園分園の堀川順子先生は、「簡単だからすぐ終わってしまうかも・・・」とおっしゃっていましたが、「これは〇〇ちゃんが好きそう」「これは〇〇くんに遊んでみてほしい」などなど、遊ぶ時をイメージし、周りの人と語り合いながらさまざまなおもちゃを作るうち、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

子どもの好みや発達をよく知って、工夫しながら楽しくおもちゃを作る保護者の方々。「こんな子にはどんな使い方がいいでしょうか」と堀川先生に相談しながら作る、盲ろう児を担当する先生方。「こんな遊び方もあるのですね」と感心しながら作る盲ろう関係者など、参加者が思い思いに学び、楽しんだ有意義なワークショップとなりました。



材料はほとんどが100円ショップで手に入る身近なものばかり。「100円ショップに行きたくなったー！」という声も聞かれました。特に人気が高かったのは、「ぶるぶるびよーん」と「にぎってりんりん」。作者のセンスが光るのは「わくわくラケット」など。全部で9種類のおもちゃが並び、1つ2つ作って遊びこむ人、たくさん作ってかばんからあふれそうな人など、楽しみ方も様々でした。

堀川先生は、ふだん、「クラフトパーティー」という名前で保護者やお子さんと一緒におもちゃ作りの機会を設けていて、それがお子さんとのかわりのヒントになったり、新しい工夫のきっかけになったりすることもあるとのこと。たくさん材料を準備し惜しみなくアイデアを教えてください、そしてプレゼントコーナーまで設けてくださった堀川先生、本当にありがとうございました。

(文責・柴崎美穂)

② ICTを使ってみよう

参加者：計30名程度（教員、保護者、盲ろう当事者、ボランティア等）

近年点字ピンディスプレイなどの技術の進歩により、ICTを活用する盲ろう者が増えています。

「ICTを使ってみよう」では、実際に盲ろう当事者とのメールのやりとりの実

演と体験を通し、盲ろう者も機器などの条件が揃えば、メールのやりとりができるということを実感していただきました。

まずは盲ろう者3名が、共通で使用しているブレイルセンスについて、ブレイルセンスの機能の紹介を交えながら、参加者に説明をしました。

次に実際に盲ろう者3名によるメールのやりとりの実演を行い、参加者にメールを書くところから、相手からのメールを受信し、メールを読んでいるところまでの流れをブレイルセンスとつなげたスクリーンを通し、見ていただきました。また、実演を踏まえ、参加者自身にも盲ろう者とメールのやりとりをするという体験をしていただきました（参加者側は参加者自身の携帯などを使用、盲ろう者は参加者からのメールをブレイルセンスで受信し、返信する）。最後に、メール以外の機能としてインターネットの検索の実演をしました。

今回は時間の都合上ブレイルセンス以外のICTについて紹介することができませんでしたが、ほんの一部ではあるものの、盲ろう者が日常生活の中でICTを



活用している様子を見ていただきながら、参加者にICTの活用について理解を深めていただくことができました。

今後はICTの技術が進むとともに、盲ろう者が活用できるICTが増えて行く予想されるため、ICTに関するワークショップを続けることが課題になるでしょう。

（文責・森 敦史）

③ 盲ろう体験「ラジオ体操第3をやってみよう」

参加者：計15名（教員7名、ふうわ6名、その他当事者2名）

ラジオ体操第3は、参加者のほとんどが知らない運動です。参加者は盲ろうの方々に見たことも聞いたこともない運動（動き、動作、行動）を伝え、運動できるようにするにはどうしたら良いかを考えました。

ワークショップでは、アイマスクと耳栓をして、電車ごっこや簡単な動作を隣の人に伝えるアイスブレーキング。ペアの一人は擬似盲ろう状態になり、ラジオ体操の動きを教える側、教わる側それぞれの立場を体験し、正解DVDを見る。盲ろうの方に動きを伝える時、手を持って他動的に動かす以外の教え方のヒントをいくつか体験してみる。教え方のヒントは、動かす部位、動かす方向、動かす速度や表情、ゴールをどう伝えるか、動きや肢位にどのような名前を付けるのか、ロープなどを使った動きづくり等を体験しました。ワークショップでの経験や教え方のヒントを参考にラジオ体操の残りを伝え合い、最後にラジオ体操第3を通して行いました。

参加者からは、「（担当している）盲ろうの方はラジオ体操が下手なので、参

加しました。もっと簡単と思っていましたが、伝えることも、教わることも、とても難しい事でした」「動きを一つ伝える際に余計なところを触ってしまい、伝えるべき動きとガイドする動きを区別させることが難しい」「盲ろうの方が手を振って歩くのは難しいというお話を聞きました。うちの子もそうなのです。こんな方法でやればもしかしたら伝えられたかも…」などの感想が話されました。参加者の日々の経験や伝え方・教え方のツボを共有できるところまでは行きませんでした。盲ろうの方に運動を伝えることの難しさ、盲ろうの方が運動を習得する難しさを体験する時間になりました。



(文責・星野 勉)

④ 盲ろう乳幼児・児童・生徒をはじめ担当したあなたへ

参加者：計7名（視覚特別支援学校4名、聴覚特別支援学校2名、ふうわ1名）
このワークショップに集まったのは、盲ろう児を担当している盲学校の小学部・寄宿舎の先生、聾学校の幼稚部の先生、聾学校幼稚部のお子さんの保護者でした。進行は中澤会長が担当し、全国特別支援教育推進連盟の落合先生も参加されました。

まず、自己紹介とお子さんの簡単な紹介、現在の課題等についての説明を行いました。先生方の中には盲学校、聾学校両方の経験のある方も数人おり、どちらの学校にも両方の専門知識のある先生がいました。それだけに、視覚、聴覚どちらかのみ障害のあるお子さんと「盲ろう」のお子さんでは、かなり違うということを実感されているようでした。また、保護者からは、盲学校と聾学校の両方に在籍してみたが、どちらの学校でも「盲ろう」という状態に対して十分な理解と支援が得られにくく苦慮している、という悩みをうかがいました。

その後、ざっくばらんに悩みを語り合う中で解決の糸口を見つけていこう、ということで話し合いを進めました。参加者からは

- ・集団での指導場面で、盲ろうのお子さんにとってわかりづらい部分をどのように支援していけばよいか。
- ・コミュニケーションの力をどのように育てていけばよいか。
- ・見通しを持つことができることを目指して試行錯誤しているが、なかなか成果が見えてこない、この方法で良いのだろうか、という不安がある。
- ・生活リズムが整いにくいことに対して、どのように取り組めばよいのか。

というような内容が出されました。「盲ろう」という状態に置かれたお子さんがその能力を発揮して育って行くには、わかりやすい環境、教材、十分な時間が必要である、ということは、皆さん理解された上での悩みだったように思いました。そして、それぞれの学校の体制の中でそれを実現していくことの難しさ、という壁が共通の悩みでした。中澤先生からは、それぞれの悩みに対して、具体的なアドバイスや提案をいただきました。「盲ろう児の教育がどのように行

われているのかを知りたくて参加した」という落合先生からも、心強い発言をいただきました。

まだ自分自身が「盲ろう児教育」に対して先の見通しを十分に持てていない不安の中で、ここで得た新しい知識や情報を持ち帰り、学校の中で実行して行くためには大きなエネルギーが必要です。しかし、「盲ろう教育研究会やふうわの



仲間がいて、全国各地でそれぞれ頑張っている、応援してくれる人もたくさんいる」と今回参加する中で知ったことが、エネルギーの一部となっていくのではないのでしょうか。このワークショップに参加された皆さん、今日も頑張ってお子さん方と向き合われているのでしょうかね。その後、どうしている？と情報交換したいですね。

(文責：長尾公美子)

●運営委員会・事務局より

第13回研究協議会・定期総会にご参加の皆様、お忙しい中、ありがとうございました。保護者、ボランティアの方々をはじめとして、当日運営に御協力いただいた参加者のみなさまには、心よりお礼申し上げます。皆様のアンケートでは、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからはより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しく願いいたします。

●会費納入のお知らせ

・年会費（2,000円／年）の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたらご容赦下さい。

(例)「2015未」：2015年度分未納を表しています。

・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。

◇振込・振替先（みずほ銀行、または ゆうちょ銀行をご利用下さい）

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡下さい。



全国盲ろう教育研究会 第14回研究協議会・定期総会
期日：2016年 8月6日（土）・7日（日）

*詳細につきましては、2016年4月頃お知らせする予定です